

# ソビエトのマスコミにみる「男女平等」

—中央テレビとプラウダを中心に—

笹 尾 道 子

## はじめに

グラスノスチのおかげで多くのタブーが解かれ、いまソビエトのマスコミは活気にあふれている。テレビには日本ならカットされそうな場面まで登場するこの頃である。しかしソビエト中央テレビを視聴し始めて、あることが妙に気になり出した。男性に比べ、女性の発話がかかなり少なく感じられること、男女の話題に偏りがあるように思われることである。憲法には特別に男女平等がうたわれ、保育所の完備や育児休暇など働く女性のための施策も整い、女性の社会進出めざましく、男女平等が日本よりはかなり進んでいると思われるソビエトで、もしテレビでの男女の扱いに違いがあるとすれば、なぜなのか。

マスコミは、多数の人々に日々の出来事を伝え、様々な知識を提供する。だが情報の伝え方によっては時に視聴者に偏見を抱かせ、人々を扇動する力さえ持つ。特にテレビは、情報の受け手が数千万人にも達することがあるから、影響力は強大である。そのテレビに登場し、多数の人々に語りかける話し手が、一方の性に偏っていることの意味は小さくない。

本論ではまず、ソビエト中央テレビの1日の放送時間中に発話する男女の数、職業、発話の長さ、話題を比較する。次にテレビの発話とプラウダ他の新聞・雑誌記事の中から話者（筆者）の男女観がうかがえる表現を取り出し、分析し、それらとソビエト女性の社会と家庭における実態との関係を見て行くことにより、最初に述べた謎を解く鍵を捜すことにする。

## I 中央テレビにおける男女の発話状況

ソビエトの放送衛星ゴリゾントで送られてくる中央テレビの極東向け放送（Орбита 1）は、時間がずれているだけで、モスクワでの第一プログラムにはほぼ匹敵する。1週間で一番放送時間が長く、番組もバラエティーに富む土曜日と、ウィークデーの1日を選ぶことにし、またゴルバチョフなどの長い演説がありそうな日を選び、1989年4月1日（土）と

5月24日(水)の両日、全ての番組をビデオに録画した。劇映画、アニメーション、歌および演芸、外国放送局製作の番組を除き、5秒以上発話した者を選んで、その男女別の数、発話時間、発話内容を分野別に調べまとめたのが、表1および2である。分野名のうち、ニュース・司会とあるのは、夕方の「ブレーミャ」と朝の「120分」のアナウンサー及び司会者の発話内容が数秒ずつ多岐にわたるため、ひとくくりにしたことによる。なお対象はロシア語による発話に限った。

表1 4月1日(土)の発話時間の男女比

	女性 (82人)	男性 (185人)
政治・経済	13分38秒	2時間34分00秒
文化	52 31	2 43 38
社会	11 07	37 21
生活	11 59	9 10
科学	58	4 34
スポーツ	5 10	6 12
天気	8 08	0
ニュース・司会	8 21	27 29
番組案内	14 35	0
広告	16	55
計	2時間06分43秒 (23.9%)	6時間43分19秒 (76.1%)

表2 5月24日(水)の発話時間の男女比

	女性 (34人)	男性 (96人)
政治・経済	0分23秒	2時間29分19秒
文化	27 01	11 30
社会	1 33	8 04
生活	4 21	25 14
科学	1 30	37 29
スポーツ	8 02	59 19
天気	7 34	0
ニュース・司会	17 37	20 57
番組案内	12 24	3 36
広告	0	2 23
計	1時間20分25秒 (20.2%)	5時間17分51秒 (79.8%)

土曜日の発話者は合計267人で、うち女性は82人、30.7%であった。女性の発話時間の合計は、2時間6分43秒で、全体の23.9%に過ぎなかった。男女の人数比は2.3対1、時間比は3.2対1となっている。つまり男性は全体として、女性の3倍以上話していることになる。(表1)

水曜日ではその差はもっと大きく、発話者130人中女性は34人で、26.2%、発話時間は1時間20分25秒で、全体の20.2%であった。男女の人数比は2.8対1、発話時間比は4対

1 と開いている。(表2)

発話内容を見ると、女性は土曜・水曜とも文化関係が最も多い。男性は政治・経済に関する発話が多く、両日合わせて5時間以上になるのに対し、女性は14分と少しである。女性が男性を上回っている分野は、天気と番組案内(両日とも)、および生活(土曜)と文化(水曜)のみで、あとはすべて男性上位となっている<sup>1)</sup>。

発話者の職業を見ると、両日合わせた397人のうちの29%に当たる115人(男79, 女36)がアナウンサー、レポーター、解説者、海外特派員などジャーナリストであった。特によくしゃべる政治解説者、海外特派員の中に女性は一人だけ、レポーターも女性の比率が低かった。次に多かったのは、俳優、詩人など芸術関係者62人(男50, 女12)で、全体の16%、次が人民代議員<sup>2)</sup>、党役員など政治関係の47人(男41, 女6)で12%、学者およびコンピュータ関係が23人(全員男性)で6%と続く。以下、労働者15人(男7, 女8)、通訳13人(男5, 女8)、子ども13人(男7, 女6)、企業幹部11人(男10, 女1)、医者7人(男3, 女4)、学生7人(全員女性)、教師、料理家、ガイドその他が20人(男13, 女7)、不明64人(男43, 女21)となっている<sup>3)</sup>。ジャーナリストがもっとも多いのは当然のこととして、その他ではやはり社会的影響力の強い職種がテレビ出演者の上位を占め、発話時間も長い。

男性だけを見ると、ジャーナリスト、芸術関係、政治関係、学者、企業幹部の順に多いのに対し、女性はジャーナリスト、芸術関係、労働者・通訳、学生の順になっており、政治家や学者が上位に顔を出していない。また女性ジャーナリストについて言うと、アナウンサーと国内レポーターが大半で、ほかに天気とスポーツの解説者と文化関係の評論員が数人、海外特派員は1人だけであった。

以上からわかることは、女性は発話者数でも、発話総量でも、男性を大きく下回り、また発話内容も文化関係に偏り、政治・経済関係が男性にくらべ極端に少ないことである。発話者の職業分布にも、男女で大きな相違がみられる。

日本のテレビのニュース番組についての似たような調査があり、比較することができる。NHK総合テレビ「夜7時のニュース」で男女のアナウンサーがそれぞれどのようなニュースをどのくらい読んでいるかを小玉美意子氏が調査したところによると、1981年には、男性が全体の78%を読んでおり、政治と経済の分野で、男女の読む量の差が最も大きかった。84年の調査では、アナウンサーの読むニュースの項目数、分野とも、男女の差はみられなかったものの、レポーターが男性だけであった。また女性が登場するニュースの項目

- 
- 1) 番組「旅行者クラブ」「Клуб путешественников」はスポーツに入れた。
  - 2) 人民代議員は本職と関係なくすべて政治関係者とみなした。
  - 3) 職業不明には街頭でインタビューされた人々などが含まれる。

の割合は12.3%であった<sup>4)</sup>。男性上位という点で、ソビエトのテレビは小玉氏の調査結果とまことによく似ていると言える。

## II 男女にまつわる表現

ソビエトのマスコミで伝えられるさまざまな人々の男女観を探るため、1988年から89年前半にかけて、中央テレビとブラウダその他の記事から、気になる言葉を拾ってみた。それらの内容を分類すると、大きく3種類に分かれる。それぞれについて典型的な例をあげておく。

### 1 「ソビエトの女性は解放され過ぎた、女はもっと女らしく、男は男らしく」

Мы немного забыли, что женщина есть женщина. Мы в нашей борьбе за эмансипацию, за наши права забыли, что женщина должна быть обаятельной, милой, доброй, что должны рядом с ней быть сильные, мужественные, оберегающие ее мужчины.

私たちは、女性は女性であることを少し忘れていました。解放をめざす、女性の権利をめざす戦いの中で忘れていたことは、女性は魅力的で、かわいくて、やさしくあらねばならないこと、そのそばには女性を守ってくれる強い、男らしい男性がいなくてはならないことです。(女、美人コンテスト審査委員長, 89/5/21放送)

Мы, женщины за равные права, но против равного права на физический труд, на одинаковый отпуск, на одинаковую продолжительность рабочего дня. Надо, наконец, дать возможность заниматься женщине тем, что ей предопределено самой природой, т. е. воспитанием детей и материнством.

私たち女性は平等に賛成です。でも肉体労働や、同じ長さの休暇、同じ長さの労働時間に対する平等には反対です。もういいかげんに、女性に自然が定めたこと、つまり育児と母性に女性がたずさわられるようにしなければなりません。(女、代議員、「ブレーミャ」89/6/2放送)

Основная функция женщины — воспитать ребенка. Если она не сделает

4) 小玉美意子「ジャーナリズムの女性観」学文社, 1989, p. 88, 132, 133.

этого за свою жизнь, то она практически ничего не сделала.

女性の主な役割は子どもを育てることだと思います。もし一生の間にそれをしなかったら、実際には何もなかったと同じです。(女, 高校生, 「もし…だったら幸せでしょう」 89/1/26放送)

Женщина должна быть женственной.

女は女らしくなくちゃ。(若者, 同上番組)

Главой в доме все-таки должен быть мужчина.

一家の長はやっぱり男であるべきよ。(女, 同上番組)

Красиво одетая, умело подкрашенная женщина, невольно делается стройнее и выше. Такая женщина возвышает мужчину. Настоящий мужчина делает выше свою страну.

美しく装い、上手にお化粧した女性は、ひとりでのスタイルが良くなり、背が高くなる。そういう女性は男性を高める。そして本当の男性は自分の国を高める。(女, 読者, ブラウダ, 89/3/7)

Женщина думает, что ее ждут на работе... Никто на свете ее не ждет, кроме ее детей.

Женщина на работе — это распад семьи и малая рождаемость.

Без уважения к отцу не будет послушания перед командиром, почтения перед начальником и уважения к главе государства.

職場でみんなが自分を待っていてくれると女性は考える……自分の子供達を除いて、この世で女性を待っている者などいない。

女性が働くと、家庭が崩壊し、出生率が低下する。

父親を尊敬せずして指揮官への服従, 上司に対する敬意, 国家元首への尊敬は育たない。(男, 「何よりも大事なものの一家の泉のそばで」ブラウダ, 89/2/22)

Ибо уровень милосердия общества определяется его отношением не к преуспевающим и сильным, а к тем, кто слаб. Женщина слаба. Слабей мужчины изначально.

社会の慈悲活動の水準は、成功者や強者への態度ではなく、弱者に対する姿勢で決まる。

女性は弱い。そもそもの初めから男性より弱いのだ。(男, 「女性達, 私たちを許して」ア  
ガニョーク29号/89)

## 2 「女性はまだ十分解放されていない」

Любая работающая женщина ежедневно выполняет у нас две смены — на производстве и дома. Надо всемерно нацеливать общественное мнение на необходимость “акта домашнего раскрепощения”. Нужна семейная перестройка.

働く女性は誰もが毎日、職場と家での2交代で働いています。全力を尽くして世論の注  
意を「家庭内の妙隷解放行動」の必要性に向けさせなくてはなりません。家庭のペレスト  
ロイカが必要なのです。(女, 詩人, プラウダ, 89/3/8)

В исполкомах местных Советов, правительствах автономных и союзных республик, тем более в Совете Министров СССР женщины — большая редкость, чрезвычайно мало их. А ведь половина нашего общества, даже чуть больше — это женщины... Надо поднять роль женщины в исполнительных органах, отвечающих за осуществление принятых законов.

地方ソビエト執行委員会, 自治共和国及び共和国政府, とりわけソ連邦閣僚会議の中の  
女性はきわめてまれで、極端に少ない。私たちの社会の半分は、半分より少し多いのだけ  
れど、女性なんですからね……採択された法律に責任を持つ執行機関の中の女性の役割を  
高める必要があります。(女, 物理学博士, プラウダ, 89/3/8)

Наше общество очень патриархально.

私たちの社会はとても家父長的なのです。(女, 評論家, 「現代の女性」89/2/5放送)

## 3 「女性よ、社会と家庭でもっと活躍せよ」

Перестройка немыслима без деятельного вмешательства и участия женщины во всех обновлениях нашего общества.

Самой важной для судеб страны и социализма формой творческого труда женщины является труд материнский.

Мы славим женщину вдвойне за то, что, став наравне с мужчиной

активной участницей общественной жизни, она остается источником женственности, душевной тонкости и красоты. Она — хранительница семейного очага, она выполняет великую социальную роль матери.

社会の全ての改革に女性が活発に介入し参加することがなければ、ペレストロイカは考えられません。

国と社会主義の運命にとって、女性のもっとも大事な創造活動の形態は、母としての仕事です。

女性が男性と肩をならべ社会生活の積極的参加者となると同時に、女らしさ、心の繊細さと美しさの源となり続けていることに、2倍の賞賛を贈ります。女性は家庭の護り手であり、母という偉大な社会的役割を果たしているのです。(女、文化省次官、「国際婦人デー記念集会」89/3/8放送)

Советские женщины! Повседневно заботясь о благе семьи, активно участвуйте в труде и общественных делах, борьбе за мир!

ソビエトの婦人達よ！ 毎日家族の幸せに気を配りながら、仕事と社会活動、平和のための戦いに積極的に参加せよ！（メーデースローガン、プラウダ、89/4/16）

量的に最も多いのは1の型に分類されるもので、発言者（筆者）は老若男女を問わない。これらはさらに「女性よ家庭に帰れ」組と「もっと母性保護を」組にわかれる。すでに女性の労働力は欠かせないものになっているから、さすがに前者をはっきり主張するものはごく少数であるが、女性の家庭内での役割重視が両者の共通点である。家事・育児が女性本来の任務であることを忘れ、家庭を軽視してきたために、離婚が増え、出生率も低下し、こどもの非行が増えた。女性はもっと優しく、美しく、夫と子どもの喜びの源にならねばならない。男女平等を追求し過ぎて、女性が女性であることを忘れていた。女性は「弱き性」(слабый пол)「美しき性」(прекрасный пол)なのだから、十分な保護が必要である、育児にもっと時間がさけるよう、女性の労働時間を男性より短くすべきである。「強き性」である男性は、もっと男らしく、一家の長としての役をしっかりと果たすべきである、etc... 要するに、母性と男女の相違の強調である。

2に分類される主張は、「ソビエト社会はまだ家父長意識が強く、女性は仕事のほかに家事一切の負担を背負い、二重苦の状態にある。また政策決定、執行の場に女性が極端に少ないことが、今日のさまざまな問題を引き起こした。男性に家事の半分を分担させ、女性をもっと政治の場に参加させなければ、女性の真の解放はない」とするものであるが、数の上では非常に少なかった。88年2月19日付けプラウダには、婦人問題に関する読者の

投書が11通載っているが、その中の8通（男6，女2）までが母性と男女の相違を強調しているのに対し、家庭内の男女平等を主張しているのは1通（女）のみで、その他が2通（男1，女1）となっている。マスコミが取り上げる主張が、そのまま正確に世論を反映しているとは限らないが、少なくともマスコミ自身の姿勢を示しているし、それがまた世論にも影響しているはずである。したがってソビエト社会では2より1の型の男女観が圧倒的主流をなしていると考えてよからう。

第3の論調は政府関係者にみられるもので、社会の全ての分野に女性が積極的に参加することなしに、ペレストロイカを成功させることはできないとする一方で、家庭の強化を打ち出し、そこでの母親としての役割を女性本来の使命とするものである。この原点はゴルバチョフの次の言葉にみることができる。

Сегодня страна нуждается в том, чтобы в управление экономикой, культурой, в общественную жизнь еще активнее вовлекались женщины...

На январском Пленуме был поднят и вопрос о более широком выдвижении женщин на руководящую работу...

...Мы гордимся тем, что дала Советская власть женщине: равное право с мужчиной на труд, никаких различий в оплате за тот же труд, социальную защиту...

Но в череде наших трудных будней мы как бы упустили из виду специфические права и потребности женщины, связанные с ее ролью матери, хозяйки семьи, ее незаменимой функцией, по воспитанию детей. У женщины, занятой на стройке, на производстве, в сфере обслуживания, в науке, поглощенной творческой работой, просто не стало хватать времени на самые житейские дела — домашнее хозяйство, воспитание детей и просто на уют в кругу семьи. И казалось, что многие беды — и в поведении детей и молодежи, и в вопросах общественной нравственности, культуры, да и на производстве — связаны с ослаблением семейных уз, девальвацией семейного долга.

今日わが国では、経済政策、文化政策、社会活動の分野で、女性がより一層積極的に参加してくることが必要とされている……

1月総会では、女性をもっと広く管理職に登用する問題も提起された……

……ソビエト政府が女性に、男性と同等に働き、同等の賃金をもらい、社会保障を受ける権利を与えたことを、私たちは誇りに思っている……

しかし困難な忙しい日々の生活の中で、女性の母として、主婦としての役割、育児というかけがえのない役割とかかわる、女性特有の権利と要求を、私たちは見逃してしまった。建設現場や生産現場、サービス、科学、創造活動の分野で忙しく働く女性には、家事、育児などの日常的な仕事にさく時間、居ごちの良いい家庭を築くための時間が足りなくなる。そして青少年の非行とか、社会道徳や文化の問題、生産現場での問題の多くが、家族のきずなの弱まり、家族の一員としての義務感の低下と関係することが明らかになったのだ<sup>5)</sup>。

ゴルバチョフは女性を管理職に登用する必要性に触れる一方で、今日の社会問題の多くが、女性が忙しすぎて家庭のためにさく時間が少ないために起きているとしている。家庭内での夫、父親の役割については全く言及していない。家事・育児を女性だけの使命とする点では1の型の男女観と一致しているが、社会の指導部分に女性が少ない点も問題ありとしていて、結局、女性よ、社会と家庭でもっと働けという主張であると言えよう。これをはっきり言い表したのが今年のメーデースローガンである。いったいソビエトの女性は、そんなに家事をおろそかにしているのだろうか。また管理職に女性が少ないと言うが、それはどういう原因からなのか。

### III ソビエト女性の実態

ソビエトでは労働可能な女性の92%が働くか学んでいるといわれる。1987年の統計によれば、ソビエトの全労働者、勤労者の50.8%が女性である。とりわけ女性の割合が高いのは、商業・外食部門(82%)、保健・社会保障関係(81%)、教育関係(75%)、文化関係(73%)である。高等教育機関に学ぶ女性の割合は、86年には56%に達しているが、研究者では40%、準博士では28%、博士では13%と割合を下げていく<sup>6)</sup>。これに対し手作業部門で働く女性の割合が、工業で58%、農業で98%にもものぼることが問題になっている<sup>7)</sup>。また深夜労働や重労働にたずさわる女性が多数いることもマスコミでしばしば指摘されている。全体として、熟練をあまり必要としない、比較的低賃金の職種で働く女性が多いと言える。

女性の企業長・校長・団体の長は50万人以上いるが、これは全体の11%に当たる<sup>8)</sup>。職

5) М. С. Горбачев, Перестройка и новое мышление для нашей страны и для всего мира, М, 1988, с. 116, 117.

6) ГОСКОМСТАТ СССР, Женщины в СССР 1988, М. 1988.

7) Н. П. Силкова, О наших женщинах, Правда, 1989/3/9.

8) Е. Н. Ершова, Э. Е. Новикова, СССР-США: женщина и общество, М. 1988, с. 129.

長・部長・係長クラスは約100万人いるとのことである。日本の87年の女性役職者数（部長，課長，係長）48,600人に比べればずいぶん多いという印象を受けるが，日本はなにしろ世界に名だたる男女不平等の国であるから，この数字と比べてもあまり意味がないかも知れない。なお87年の日本の雇用者総数に占める女性の割合は36.5%（パートを含む）であった<sup>9)</sup>。

ジャーナリズムの世界はどうなっているのだろうか。モスクワ大学ジャーナリズム学部で学ぶ学生の50%が女性で，マスコミ界で働く女性は40%。しかし女性解説者はごく少数で，政治評論員はゼロ，海外特派員はたった一人という状況だそうである。学部の国際関係学科では女子を全く受け入れておらず，その理由は，育ててもマスコミで採用してくれないためだという<sup>10)</sup>。モスクワで働く外国人女性特派員数が100名を越しているというのに，ソビエトのマスコミは大事な分野でまだ女性を締め出しているわけだ。

政治の分野へのソビエト女性の進出度はどうであろうか。89年前半に選挙のあった人民代議員2,249名中女性は352名で約16%しかいない。最高会議議員に選ばれた女性は，542名中100人前後で<sup>11)</sup>，約18%である。84年の選挙では，最高会議に女性は33%いたから，今回大幅に減ったことになる。日本の衆議院での女性の比率約2%，参議院での約13%（89年7月24日現在）にくらべれば多いが，人口の半分が女性であることを考えれば，男女平等には程遠い数字と言わざるを得ない。女性大臣はゼロである。なおソビエト共産党員中の女性の割合は28%である<sup>12)</sup>。勤労者の過半数を女性が占めるソビエトで，大事な国政の場にこのように女性が少ないのはなぜか。

大きな理由のひとつとして家事の重圧であろう。85年3月のアンケート調査によれば，ソビエトの働く女性は労働日には一日平均3時間13分，休日には6時間18分の家事をしているという<sup>13)</sup>。89年3月7日に文化省次官のシルコワがおこなった演説によると，女性の家事労働は週40時間に達しているとのことである（男性は6時間）。この原因として彼女は，物不足により買物の行列がさらに長くなっていることと，家事の機械化が先進国の5倍遅れていることをあげている。昼は男性なみに働き，家へ帰れば家事のほとんどを引き受けている女性にとっては，それだけで精いっぱい，自分の日々の生活に直接関係がないように見える政治の場へは，出て行く余裕がないというのが実状であろう。

9) 「女性の役付き10年間で倍増」朝日新聞，1988/10/31。なお，日本の女性管理職の割合は，全体の1%強程度である。

10) 89年5月22日放送中央テレビ「120分」のジャーナリズム学部長の話にもとづく。

11) 89年6月1日付けのブラウダに掲載された名簿をもとに計算したが，性別を確かめられないものが4名あった。

12) E. H. Ершова, Э. Е. Новикова, СССР-США: женщина и общества, М. 1988, с. 80.

13) 内訳は，炊事1時間13分（休日1時間57分），住まい・衣服の手入れ56分（2時間21分），育児14分（25分），買物46分（1時間25分），その他4分（10分）。ГОСКОМСТАТ СССР, Женщины в СССР 1988 による。

そして家事の重圧がおもに女性にのみかかっている原因として、ソビエト人がもつ、根強い性別役割分担意識をあげることができよう。それはⅡで取り上げたように、マスコミが伝える、各層の人々の言葉の中に読み取ることができる。「どんなに外で働いていようと、女性本来の使命は家庭を守り、子どもを育てることにある。女性がなるべく家事に時間が割けるよう、社会的労働の負担を軽くする必要がある。リーダーシップを取るのも、政治の場へ出て行くのも男性の役割。女は女らしく、男は男らしく。」という考え方である。意識としては、大方の日本人とまことによく似ていることに驚かされる。違うのはソビエト女性のほとんどがフルタイムで働いている上に、機械化の遅れた長時間の家事労働をしているため、日本の共働き女性より疲れているであろうことと、最近日本の女性の間では男女平等意識と政治意識が高まってきており、マスコミなどで上記のような主張をあからさまにしようものなら、痛烈な反撃を受ける覚悟が必要になってきていることであろう。

社会制度が変わっても、人間の意識の変革は非常にむずかしいことがよくわかる。そして意識は、女性の社会と家庭における実態ともよく関連している。ペレストロイカの中で、家庭の役割と母性に見直しと保護が強調されるようになって、性別役割分担型の男女観はむしろ力を増してきているように感じられる。重労働や深夜業でやむなく働く女性にとっては、母性保護規定の強化がたしかに必要である。女性は育児休暇を有給で1年半、無休で1年半、計3年までとれることが最近決まった<sup>14)</sup>。育児になるべく長く専念したいという女性にとっては朗報である。しかしこれは一方で、女性が職業的力量を高めるのに最も適した若い時代に、長期間職場から離れ、キャリアを中断し、男性に比べ大きく遅れをとることをも意味する。社会の指導的部分に登用されるべき女性が育ちにくくなるわけだ。女性の管理職への登用の必要性をいいながら、一方で母性だけを強調することは、このような矛盾を含んでいることに、ペレストロイカ推進者たちは気づいていないのだろうか。婚姻法に「夫も妻もどちらも家庭と子どものめんどうをみなくてはならない」という条項を持ち、育児休暇を男性にも認めているスウェーデンの方が、真の男女平等への道を、1歩も2歩も先に進んでいる。育児の喜びを味わう権利は、男性にもあるはずだから。

以上見てきたように、テレビでの男女の発話状況は、ソビエト人の男女観と実態とを如実に、ある時は増幅して伝えているのである。

仕事も家庭も百パーセントやりこなすことを求められ、疲れ、悩んでいるソビエト女性の、あきらめにも似た次の言葉が印象深い。

14) 89年8月22日閣僚会議等で決議、早い所で89年12月より実施の予定。

Если хорошая работник, то плохая мать и жена. Если хорошая жена и мать, то посредственная работник. А если выполняешь эти и другие обязанности, то это уже не человек.

よい働き手であろうとすれば、悪い母・妻となり、よい妻であり母であろうとすれば、働き手としてはまあまあということになるでしょう。もし両方の義務を見事にこなしているなら、それはもう人間ではありません。

Я нужна мужу, детям, матери, работе. Только себе не нужна.

夫も、子供も、母も、仕事も私を必要としています。でも私自身だけは私を必要としていないのです。(いずれも女、編集部への手紙、「もし……だったら幸せなのに」、89/1/26放送)

## ま と め

ソビエト中央テレビ(Орбита 1)における男女の発話状況を調べた結果、発話者の数、職業、発話時間、発話内容のいずれにも、男女の間で大きな不均衡がみられた。数で男性は女性の2倍以上、時間では3倍以上に及ぶ。政治解説員、海外特派員は男性で占められている。ジャーナリスト以外の職業では、男性は芸術、政治関係、学者、企業幹部の順に多いのに対し、女性は芸術関係、労働者、学生の順になっていた。政治・経済に関する発言は、ほとんど男性という状況であった。

テレビとプラウダその他のマスコミで伝えられるソビエト人の男女観は、性別役割分担意識にもとづく女らしさ、男らしさと母性の強調が目だった。

ソビエト女性の実態を調べると、外では男並に働き(それもあまり熟練を必要としない、比較的低賃金の分野で)、家に帰れば長時間の家事が待っているという姿が浮かび上がった。上級管理職や学者、国政の場に女性は極端に少ない。

ソビエト中央テレビにおける発話状況は、ソビエトのマスコミ自身の体質の古さとともに、何よりもソビエト社会の男女観と、それに起因する女性の実態とを如実に反映するものだった。

もし経済改革がうまく行って買物の行列が短くなり、機械化が進んで家事労働が軽くなっても、母性神話と性別役割分担意識からの解放がない限り、ソビエト女性の苦悩と男女格差は続くであろう。それは日本の女性も全く同じである。